

平等であるということ

成瀬中学校 三年

大倉

志乃

「おはようございます。」

毎朝交わすお決まりの挨拶。人と人が繋が
る二とが出来る魔法の言葉。でも、それが聞
こえないとしたら、言えないとしたら、じゃ
あそれはその人とは繋がれないとなっ
てしま
うのでしょ
うか。それは違
います。

私がまだ小学校三年生の時に、総合の学習

で福祉について学習する機会がありました。
生まれつき目の見え
ない人がいる。耳が聞
けない人、足が不自由な人がいる。私はこの
事実を知って衝撃を受けました。なぜなら、
その時の私はまだ幼か
ったため、そんな人は
いないと思っ
ていたからです。自分が見えて
いるこの景色も、聞
こえて
いる友達の声も、
全てが当たり前
ではないことを知りました。
ある日、特別授業で車いすに
乗ることがあ
りました。実際に乗っ
てタイヤを回す側、後

ろから押しあげると、ちもやったので
すが、それはもう本当に大変でした。少しの段
差を通るだけでも、すごく力を使いました。思っ
ていたよりも、車いすがすごく重かったのを今
でも鮮明に覚えています。

障害を持っていらっしゃる方々の体験を通して、一
つの生活が大変だと知ることが出来た後、
私はふと思いました。

「自分のことが嫌になったりしないのかな。
体のどこか一つでも使えないなんて不便だと
思うし、そんな自分が嫌でしうがなくなっ
ちやうんじやないかな」と思いました。
でも、そんな私の考えは中学生になって無
くなりました。

中学一年生の頃、とある講演会で私はある
人物にすごく興味を持ちました。彼の名前は
ケニー・エイスタイン。またの名を、スケボ
ーに乗った「天使」。彼は、出生時より脊椎が
途中までしかない未発達状態であり、またそ
の後、脚の付け根に悪性腫瘍が見つかり、脚

を完全に切断してしまっただ。それでも彼は、
車いすに乗ることや義足を付けることを嫌が
り、自由に暮らしていた。そしてなにより、
ケニーは自分のことが大好きだっただ。
私はそれを知って、今までの考え方が大き
く変わりました。やはり、人はみんな平等だ
と改めて思ったのです。何を思おうと、何を
しようとして、あなたはお○○だからいけない
なんてことは一切ありません。障害を持って
る方々は生活していく上で出来ないこと・難
しいこと沢山あります。でもそれを私たちが
支えてあげることがすごく大切だと思います。
でも、いざ町中で障害を持っていてる方と会
うとどうしても勇気が出ませんでした。もし
私が話しかけて相手の方が障害という壁を大
きく感じてしまっただらどうしよう、と考えて
しまっただです。結局、その人には何も出来
ませんでした。家に帰って一人で反省をしま
した。次こそは必ず話しかけよう、声をかけ
て助けてもらっただ方が嬉しいはずと信じるこ

とにしていたのです。

数週間後、私は白い杖を持った視覚障害の方と出会いました。その人は、点字ブロックを探しているようでした。私は勇気を出して声をかけました。そして、失礼しますね。と言って杖をゆっくり点字ブロックの上で動かしてあげました。すると、その人は笑って、ありがとうございます。と言ってくれました。すごく嬉しかったです。

目が見えなくなつて、耳が開こえなくなつて手を取り合えばいい。その人に合った交わる挨拶をすればいい。どんな人でも繋がることはできるんです。これからも、誰だつて平等に過ごせる平和な社会が続きますように。